田中容子先生
「研究は実践にどう生かされたか―英語の授業つくりの観点から」

徳永　俊太
（京都教育大学）

講演要旨

１．私の問題意識

私は、すべての生徒にとって「わかる」授業をどのように創ればいいかということを問題意識としてきた。それは、「考える力」を育てる授業をどのように創ればいいかということであり、何かを習得するプロセスに学習者自身が参加する授業をどのように創ればいいかという問題意識にも発展する。

２．実践の中から学んできたこと

これまで、異なる複数のコースを担当し、多様な学力層の生徒たちが学ぶ学校で実践を重ねてきたおかげで、多様な生徒たちの行為・状態から多くの大切な気づきを得てきた。なかなか基礎的事項が定着しないＡさんを担当した時は、学習における“つまずき”分析の必要性に気づかされた。理解の達成に一定量の練習と時間がかかるが、いったん理解すると応用できるＢくんを担当したことで、“量から質への転換”を実感し、適切な練習の一定量が必要であることに気づかされた。学習の場における自分のやり方への強いこだわりを持つＣくんからは、学習者の文脈へのみとりが必要であることに気づかされた。英語の書写と音読に大きな困難を抱えるＤくんからは、学習障害という視点が必要なことを学んだ。

３．大学院での学びと研究、そして実践

京都大学大学院教育学研究科へ進学しようと考えたのは、「自分の実践を語る言葉を獲得したい」という強い思いをいただいたからである。そこで得たことを４点挙げたい。一つ目は、自分と生徒が置かれている教育の現状を客観的に把握できるようになったことである。二つ目は、評価論の最新の知見、すなわち「逆向き設計論」と「パフォーマンス評価」と出会えたことである。三つ目は、修士論文執筆のプロセスで得た、実践の方向性である。修士論文では、竹内常一の授業論に取り組んだのだが、学ぶことが知識の詰込みでなく学習者自身の行為を通して腑に落ちていくものでなければならないことを感じ、これを以降の実践の方向性とすることができた。四つ目は、生徒の立場に立った教育をしたいと願って続けてきた自分の実践への自己評価を行えたことである。

大学院での学びによって、生徒たちの困難に気づきながら言語化できていなかった現実が可

視化され、指導につながるようになった。アルファベットは書けないが英語を喋れる状態であったＥさんたちの姿からは、学習への入り口を多面的に用意し、生徒が学習で身に着けた“できること”を多面的に見る眼が必要であると分析することができた。Ｆくんたちは、「放っとけ」から「英会話やったらまかしといて」と言えるまでになった。彼らの成長は、生活実感（学習の場に自分が「居て参加している」という感覚）を伴う学習による理解の深まりと捉えられる。

生徒たちは、学んだことを活用し、活用することを通じて学んだことの習熟を深める。そして、学習者が当事者となる言語活動がちからを持つことにつながるのである。

４．同僚との共同実践へ

同僚の教員との共同実践にも取り組んできた。覚え込むのではなく、理解することを重視する授業を実現するために、独自教材を用いた学び直しの授業を設定した。生徒たちの学習のスタートラインをそろえるために、独自のワークシートを作成した。理解を可視化する方策として、補助線や記号、協働学習を一斉に取り入れた。

より大きなこととして、基礎コースの易しいテキストを廃止し、コース間で異なっていた教科書を統一化した。これは「どれだけ知識を持つか」ではなく、「どのように考えるか」に焦点を当てることを教員間で合意することによって実現したことであった。Sonobe Assessment Gridの開発は、育てたい生徒の姿を記述語で表し、同僚間で共有するための試みである。この取り組みを通して、目標と多様な評価をシラバスの形式に反映し、授業の中の言語活動を改めて位置付けなおすことができた。

５．生徒たちの成長

実践の結果、生徒の成長した姿を数多く見ることができた。「グループで話しながら考えることで自分の考えが深まる」と語る生徒たち、言語活動をしながら理解を深める生徒たち、学習したことを言語活動の中で「使う」ことによって習熟を深めるのである。「もっとうまくできるようになりたい」といった基礎クラスのＮさん。「突然オープンしました！」と叫んだ基礎クラスのＳくんは、「わかる」ことが学習者にとって重要であることを私に示してくれた。

参考文献

西岡加名恵・永井正人・前野正博・田中容子、京都府立園部高等学校・附属中学校編（2017）『パフォーマンス評価で生徒の「資質・能力」を育てる―学ぶ力を育てる新たな授業とカリキュラム―』学事出版。